

本冊子では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」が実現できた子どもの姿として、「お互いの考えを比較する」、「出された意見を分類する」、「集めた情報を関連付ける」、「根拠を明らかにしながら意見を述べる」等の姿を示しています。

これらの子どもの姿を実現するための手立てを本章で述べていますが、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」が実現できた子どもの姿を別の視点から考えると、「課題解決的な学習過程で、子どもが自覚的に思考できるようになるための技法」を用いている姿とも言えます。当センターでは、平成26・27年度に実施した調査研究*で、この技法を「思考のすべ」と名付けました。ここでは、四つの「思考のすべ」について、以下のように紹介しています。

- 比較…ある視点に従って、複数の事象（情報）の共通点や相違点を明らかにすること
- 分類…ある視点に従って、複数の事象（情報）をグループ分けすること
- 関係付け…既習事項や経験と事象（情報）、または二つの事象（情報）どうしを結び付け、意味付けること
- 理由付け…考えや意見の根拠を明確にすること

従来から、学習過程の中で、これらのすべは使用されてきましたが、小・中学校の新学習指導要領において、国語科、社会科、算数・数学科、理科、総合的な学習の時間等で「比較」等の言葉が用いられています。この「思考のすべ」を使って子どもが思考していく場面を設定することと、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の実現に向けた授業改善との関連が、今回の調査研究から見えてきました。

この「思考のすべ」を、学習過程の中に取り入れる際の留意点を2点示します。1点目は、どのような課題を設定するかについて十分検討することです。すぐに解決できるような課題では、思考が活性化しないからです。2点目は、子どもが、課題を見だし見通しをもって追究したり、他者との対話によって考えを深めたり、情報を関連付けて考えを形成したりする際に有効と考えられる場合に取り入れることです。

*『思考力・判断力・表現力を育む授業づくり【理論編】【実践編】』（平成27年3月、平成28年3月 栃木県総合教育センター）